

「分散形態論による活用への統語論的アプローチ」

ー現代日本語における動詞連用形の形態統語論的分析ー

田川 拓海

キーワード：活用、連用形、分散形態論(Distributed Morphology)、不完全指定(Underspecification)、

1. はじめに

「活用(形)」は日本語の研究において常に多くの議論の対象となってきたが、形式的な(形態)統語理論の観点からはほとんど研究がなされてこなかった(cf. 内丸(2006)、内丸・三原・西山・竹沢(2007))。一方で、いわゆる記述的研究においては、三上(1953)、寺村(1984)などが提示した、学校文法における活用形に限らず述語とともに現れる文末形式のパラダイムを広くムード、モダリティという視点から体系化することを目的とした研究がきっかけとなって、各形式(形態)の持つ意味や機能についての研究が進められ、多くの精密な記述が蓄積されてきた(城田(1998)他)。しかし、管見の限りでは「ある複数の環境下において述語が同一の形態で現れる」という点については、それが中心的な問題として設定されること自体がほとんどないように見受けられる。

上で述べた形式的な研究における傾向と、記述的な研究における傾向の原因の一つとして、次のような同質の困難があるように思われる。それはすなわち、「各形態と統語構造/意味/機能などが一対一対応しないこと」である。この問題が最も顕著に現れる、いわゆる連用形の例を以下に示す。

- (1) a. 太郎は道路の脇まで車を押し、それから警察に電話をした。
- b. 太郎は転んだ拍子に前の人を押し倒してしまった。
- c. 太郎は押しに弱い。

(1a)では動詞の連用形だけで従属節を形成しているし、(1b)では複合動詞の一部として動詞連用形が現れている。また、(1c)のように、名詞として用いる場合も連用形の形態をとる。これらの多様な現れ方を、一つの意味や機能によってまとめて説明することは難しいであろう。また、同一の統語構造という観点からこれらの環境をまとめて捉えることも難しい。特に、(1b)のような語彙的複合動詞(影山(1993))や(1c)のような動詞派生名詞を統語部門から独立したレキシコンで取り扱う立場を採ると、(1a)のような句のレベルに生起する連用形との形態的同一性を予測可能な形で捉えることは無理であろう。従って、連用形という

形態自体に「不定形」や「名詞化」といった複数の機能を仮定したり（Miyara(1991)、外崎(2005)他）、同じ形態（上の例では「押し」）を「動詞連用形」と「名詞」という二つのカテゴリーに分類する（影山(1993)他）、といった必要性が出てきたりするのである。

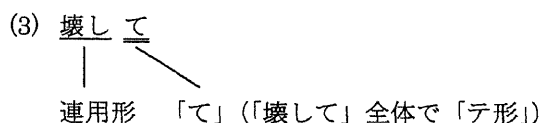
しかし、それらの方法は単に同一の形態の異なる現れ方を記述、分類しただけであり、「なぜそれらの環境に同一の形態が現れるのか」という問いには答えられてない。本稿では、分散形態論（Distributed Morphology（以下 DM）: Halle and Marantz(1993)他）を用いることによって、形式的な形態統語理論において、上で述べた「形態と統語構造の非一対一対応」を捉えることのできる枠組みを提示し、それによって現代日本語の動詞連用形の分布が予測可能な形で分析できることを示す。本稿の主張は以下の通りである。

- (2) a. 最終的にどの活用形が具現するかは、統語構造における情報によってのみ決定される。
- b. 動詞連用形は、活用形に関する形態論的規則における Elsewhere condition に従って現れる、最も一般的な形態である。

2. 用語の定義と連用形の出現環境

2.1 「連用形」の指示対象

まず、本稿において「連用形」という用語を用いてどのような形態のことを指すのかという点を明らかにしておく。



例えば「壊して」全体を「連用形」と呼ぶような立場もあるが、(3)に示すように、本稿における「連用形」とは「ます」や「ながら」に前接する動詞の形態とそれと同一な形態全てを指すものとする。本稿では「～形」という用語は常にそれぞれの形態のみに対する便宜上のラベルとして用いる。従って、そこに形態と意味の相関に関する何らかの主張（例えば「連用形は何らかの連用修飾の機能を持つ」など）は全く含めない。また、(1c)の動詞派生名詞も同一の形態を持つという条件を満たしているので、連用形に含めて考える¹。さらに、筆者は動詞の連用形と形容(動)詞の連用形は統語論的に異なったものであると考えている（田川(2005)）。従って、以降単純に「連用形」という用語で動詞の連用形を指すこととする。

上述の定義に従い、純粋に形態的な同一性のみで子音語幹動詞（いわゆる「五段動詞」）

¹ 音便形はこの観点からいうと厳密には「連用形」ではないことになる。音便形の取り扱いについては本稿の射程を越えるので稿を改めて論じることとしたい。

と母音語幹動詞（いわゆる「一段動詞」）を比べると、両者の「連用形」の出現環境が異なってくることになる。

- (4) a. 子音語幹動詞：走れ、走る、走らない、走ります
- b. 母音語幹動詞：食べろ、食べる、食べない、食べます

子音語幹動詞の場合は、(4a)に示すとおりいわゆる命令形、終止形、未然形、連用形が全て異なる形態で現れるが、(4b)に見るとおり同じ環境でも母音語幹動詞は全て同一の形態が現れる。この点についての本稿の立場は、次節における活用に対する形式的な分析を提示してからの方が理解しやすいと考えられるので、後述することとする。

2.2 連用形の分布の多様性

本節では、連用形が出現するいくつかの典型的な環境について整理しておく。この分類は、三上(1953)、鈴木(1972)、影山(1993)、村木(2002)、澤西(2003)、田川(2005)などからできるだけ多くの環境について網羅できるよう各用法を抽出し、整理したものである²。

- (5) 動詞の直後にとりたて詞が介在する場合に現れる
大声をあげすらする。
- (6) 一部のいわゆる助動詞や接続形式に前接する形態として現れる
 - a. 彼女は今にも泣きそうだ。
 - b. 私がやります。
 - c. テレビを見ながら論文を読んだ。
 - d. 歩行者に注意を払いつつ徐行してください。
 - e. 本を買いに行った。
- (7) ある種の接頭辞や語彙的要素が付加する場合に、「X+動詞連用形+する」という連鎖の一部として現れる
 - a. 走る→小走りする／*小走る、はしゃぐ→大はしゃぎする／*大はしゃぐ
 - b.、笑う→高笑いする／*高笑う、干す→陰干しする／*陰干す
- (8) 動詞句や動詞そのものに付加し範疇を変化させる接尾辞（影山(1993)、伊藤・杉岡(2002)）の前に現れる
雨の降り方、政権の担い手、荷物の運び役、...

² 形態的な同一性を重視し、多くの用法について広く記述しているものとしては、特に鈴木(1972)、澤西(2003)が参考になった。

(9) 複合語の要素として現れる³

a. 統語的複合動詞、語彙的複合動詞の前項要素になる。

→走り続ける、殴り殺す、...

b. V-N の連鎖の複合語の前項に現れる。

→打ち上げ花火、入れ知恵、置き手紙、...

(10) 連用形そのままで名詞として使用される

泳ぎ、争い、眠り、へこみ、詰まり、つまみ、すり、...

3. 分散形態論を用いた活用の統語的分析

3.1 Syntax-Morphology Interface

本稿では、活用を「文法的環境と対応して述語が異なる形態をとる現象」と考える (cf. 奥津(1981))。まず、次の仮説を提案する。

(11) 活用形の決定に関する仮説

最終的にどの活用形が具現するかは、統語構造における情報によってのみ決定される。

これはおおよそ「統語部門における計算が全て終了し、統語構造が決定すれば自動的に活用形も決定する」と言い換えることができる。ここで、これは「特定の統語構造と活用の各形態が一对一対応している」という主張ではないことに注意されたい。この仮説を仮定することが出来るのは、DM の想定する文法モデル⁴に大きく依存している。DM では、統語部門と形態部門の関係について以下のように考える。

(12) Late Insertion: 語彙挿入 (Lexical Insertion) は統語部門の計算が終了した後に
行われ、その時点で形態、音声的内容が決定される (Halle and
Marantz(1993)など)。

統語部門への出力としてすでに形態が定まった語彙項目を想定するアプローチに対して、DM では統語部門では純粋な統語/意味素性の計算のみが行われ、Spell-out 後、形態部門⁵(Morphology)と呼ばれる部門においてはじめて各素性に対する形態、音形が決定されると考える。この観点から統語構造と活用の関係を捉えなおしたものが(11)の仮説である、と言

³ 各複合語の詳しい分類に関しては影山(1993)を参照されたい。

⁴ DM における文法モデル全体に関しては、Harley and Noyer(1999), Embick and Noery(2001), 森田(2005)などを参照されたい。

⁵ 一般的な「形態論」のことでなく、DM という特定の理論における文法モデル内の一部門を指すことに注意されたい。

うこともできる。

3.2 不完全指定 (Underspecification) と Elsewhere condition

本節では、具体的な語彙挿入のメカニズムについて説明する。まず、統語部門における計算が終了した後、活用に関して参照される各形態論的規則を次のように考える。

(13) (動詞の) 活用形に関する形態論的規則⁶

- | | |
|---|----|
| a. {V[+V], C[+Imp(erative)]} ↔ V + /e/, /ro/ | 命令 |
| b. {V[+V], T[-Past]} ↔ V + /(r)u/ | 終止 |
| c. {V[+V]} ↔ V が子音語幹動詞の場合 /a/ を挿入 /__Neg ⁷ | 未然 |
| d. {V[+V]} ↔ V が子音語幹動詞の場合 /i/ を挿入 | 連用 |

本稿の分析にとって重要なのは、終止形の現れが T[-Past] という素性の有無によって左右されている、という点と、連用形に関する規則は子音語幹動詞に対する添加母音(epenthesis vowel)の挿入規則である、という点である (Poser(1983), Davis and Tsujimura(1991)など)。

そして、ある節点(node)上に[+V]の素性があった場合に(13)の規則が参照されて対応する形態が決定される。その規則の参照の仕方に関しては以下の部分集合原理 (Subset Principle) が適用される。

(14) Subset Principle⁸ (Halle(1997)、下線強調は筆者)

The phonological exponent of a Vocabulary Item is inserted into a morpheme of the terminal string if the item matches all or only a subset of the grammatical features specified in the terminal morpheme. Insertion does not take place if the Vocabulary Item contains features not present in the morpheme. Where several Vocabulary Items meet the conditions for insertion, the item matching the greatest number of features in the terminal morpheme must apply.

これはすなわち、その言語の持つ形態論的規則の中で、形成された統語の情報に対して「完全に規則に一致する形態」ではなく、「最も規則に適合する形態」が挿入される、ということである。(13)の規則と以下の例を用いて具体的に説明する。

(15) a. {V[+V], X, T[-Past], Y} → 終止形

⁶ いわゆる変格活用を持つ動詞については、個別に形態論的規則を指定する必要がある。また、いわゆる「仮定形」については現代語において「活用として」取り扱うべきかどうかという問題があり (cf. 三上(1953))、この一覧には含めないこととした。

⁷ 記号"/"の後は形態を挿入する際の様々な付加的条件である。この場合、おおよそ「後ろに否定要素がある場合」というように考える。

⁸ ここでの“Vocabulary Item”および“morpheme”という用語は DM 内で定義されたもので、一般的に使用されている用語とは違うものである。詳細は Harley and Noyer(1999)などを参照。

b. { X, V[+V], Y, Z } → 連用形

X, Y, Z はそれぞれ(13)の規則群に含まれていない素性であるとする。(15a)の例では4つの素性が存在するが、(13)の規則に照らし合わせると、下線で示した通り最も多く一致するのは(13b)の終止形形成規則であり、動詞の形態は終止形となる。また、(15b)でも同様に最も規則と適合するのは(13d)の場合であり、連用形が現れることとなる。

この原理が、本稿で提案する枠組みにおいて、「統語構造と活用の形態の非一対一対応」を予測可能な形で捉えることを可能にするメカニズムの核となる。活用とは、「多様な統語的環境に生起する述語が、必ず非常に数の限られたいずれかの形態によって具現化される」現象であるとも考えることができる。このメカニズムは最も指定と合う形態が選択されると考えることによって、統語構造の豊かさと非常に限られた数の形態論的パラダイムの間の対応関係を保証しているのである。簡単に言い換えると、語彙挿入のメカニズムは、「関係の無い素性を端的に無視できる」ということであり、不完全指定(Underspecification)という考え方を語彙挿入に適応させたものである (cf. Embick(2004))。

また、この枠組みにおける規則群 (例えば(13)) において、最も指定が少ない規則、すなわち連用形形成に関わる規則 ((13d)) は Elsewhere condition と呼ばれる、より指定が多い他の形態論的規則いずれにも該当しなかった場合に常に適用されるものである。その点で、連用形が最も一般的な形態であるということもできる。すなわち、本稿では動詞の連用形が Elsewhere form であることがその生起する環境の多様さにつながっていると考えるのである。本節以降で、ここで示した理論的枠組みと(13)の形態論的規則を用いて2.2で示した多様な環境においていずれの場合も連用形が現れることが統一的に導き出せることを示し、連用形が一種の Elsewhere form であることを具体的に示していく。

3.3 語形成の取り扱いについて

さらに、DMを採用することによって、(1a-c)の例を用いて指摘した連用形が句のレベルにも語形成のレベルにも出現することをどのように捉えられるのか、という問題にも具体的な解決案を与えることができる。DMでは、語形成を取り扱う特別な部門を想定しない。

(16) Single Engine Hypothesis (There is no “generative” lexicon)

それがいかなる要素であっても、何かを”組み合わせる”操作は、全て syntax で行われる⁹。統語部門と独立した、語形成が行われる部門は存在しない (Marantz (1997, 2001), Arad (2003), Embick and Noyer (2007))。

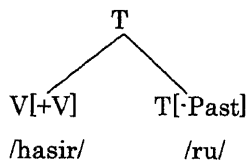
⁹ 「語形成も syntax で行われる」という仮定自体はDM特有のものではないことに注意されたい。語形成がどの部門で行われるかということはこの理論とは独立にずっと問われてきた問題である。語形成とsyntaxの関係についての種々の立場や理論についてはBorer (1998), Ackema (1999) なども参照されたい。

従って、従来ならいわゆる語形成のレベルで生成されるとする要素であっても句のレベルで生成される要素であっても、全て統語部門において計算され、その出力に対して(13)の規則が適用され動詞がどの形態になるのかが決定されと考えることができる¹⁰。もちろん DM のこのような語形成に対する立場はこれだけでは仮定に過ぎないが、それが日本語の語形成の各現象を分析する際に有効であることは田川(2005, 2007)で活用の議論とは独立に示した。

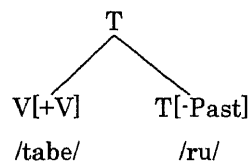
3.4 母音語幹動詞について

2.1 で(4)を例示して指摘した子音語幹動詞と母音語幹動詞の差異についてここで本稿の捉え方を示しておく。例えば、それぞれの終止形に関わる構造は次のように考えることが出来る。

(17) a. 走る¹¹

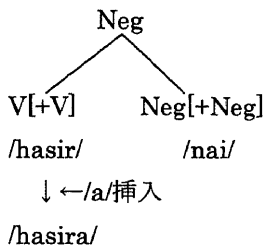


b. 食べる

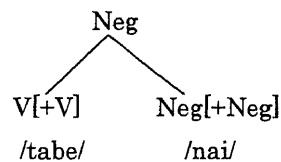


この場合、語幹部分(V[+V])に挿入される形態)といわゆる活用語尾に当たる部分(T[-Past])に挿入される形態)の対応関係は並行的である。一方で、未然形の場合は次のようになると考えられる。

(18) a. 走らない



b. 食べない



この場合、いわゆる「語形変化」に対応する操作は子音語幹動詞についてだけ起こる。これは連用形の場合も同様である。そして、母音語幹動詞の場合には「特に何も起こらない」。すなわち、母音語幹動詞の場合、(13)の規則群のうち、命令形、終止形に関わる規則

¹⁰ この仮説は *merger*, *affixation* といった形態論的操作、*assimilation* のような音韻論的操作は対象としていないということに注意されたい。

¹¹ ここでは、時制形態素 /ru/ の頭子音が子音連続を避けるために削除されると考えておく。

((13a, b)) だけを参照すれば良いことになる。また、ここで(17b)と(18b)を比べると、語幹部分 (/tabe/) は常に V[+V]に対応していることがわかる。ここで重要なのは、本稿の枠組みでは例えば「連用形の「食べ」」、「未然形の「食べ」」といった指定を一切しなくて良い、ということである。統語構造を計算し、その出力に対して具体的な動詞を挿入すれば、後は(13)の規則に従って自動的な形態が決定されるのである。

4. 各環境に対する分析

4.1 動詞語幹が T[-Past] と関係を持ってない場合に現れる連用形

本節では、3 で導入した枠組みを用いて、2.2 で整理した(5)-(10)の各環境においてそれぞれ連用形が出現することが導き出されることを示す。

まず分析の要点を述べておく。3.2 で述べたように、連用形の出現条件はおおよそ「(13)の規則における他の活用形の出現条件のいずれにも該当しない場合」であると言える。命令形と未然形の場合にはその出現環境が非常に限られているので、連用形の場合と区別するのは容易である。従って、ここでは終止形との競合、すなわち T[-Past]の要素の有無に焦点を絞って論じる。非常に簡潔に述べれば「(命令の要素も否定の要素も無く) T[-Past]が構造上動詞語幹 (V[+V]) と関係付けられなければ連用形が現れる」と予測される。

(5)の環境、「動詞の直後にとりたて詞が介在する場合に現れる」場合の構造は次のように考える。

(19) a. 弟を殴りすらする。

b. [TP[VP[XP[VP 弟を nagur]すら] ti] する i]

この現象についてはいくつかの分析がある (Fukui and Sakai(2003)、青柳(2006)他) が、ここでは、「動詞語幹と時制要素の間にとりたて詞が介在している」という点が重要である。すなわち、動詞語幹と時制要素の関係をとりたて詞の介在が邪魔するため、形態を決定する段階においては(13d)の規則が適用され動詞語幹/nagur/には/i/挿入がされて/naguri/となる。一方、時制の支持 (support) のために現れている「する」は終止形で現れている。「する」は T[-Past]と構造的な関係を持てるために終止形形成規則が適用されているのである。

次に、(6)の環境、「一部のいわゆる助動詞や接続形式に前接する形態として現れる」場合について考える。これらの要素については、そもそもそれらがとる補文内に TP レベルの投射が現れないと考える。次に示すように、その補文内には T[+Past]に対応する「た」も現われ得ない。

(20) a. *私がやったます。

b. *テレビを見たながら論文を読んだ。

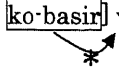
c. *本を買ったに行った。

従って、これらの動詞語幹は T[-Past]とも関係を持つことが出来ず、連用形となっているのである。

(7)の「ある種の接頭辞や語彙的要素が付加する場合に、「X+動詞連用形+する」という連鎖の一部として現れる」場合については、すでに田川(2005)において分析を行った。その構造は簡単に示すと次のようになる。

(21) a. 小走りする

b. [TP [vP [vP [ko-basin] v] する]



何らかの要素（ここでは接頭辞「小」）が動詞語幹に付加することによって、上位の主要部へ移動することが出来なくなり、T[-Past]と関係を持つことができない¹²。従って、動詞語幹の部分は連用形になる。また、ここでも上述した(5)の分析と同様の理由で、「する」は終止形となって現れている。

(8)の「動詞句や動詞そのものに付加し範疇を変化させる接尾辞の前に現れる」場合、(9)の「複合語の要素として現れる」場合については同様の説明が可能である。これらの環境は従来語形成の理論で取り扱われてきたことからわかるとおり、その構造内に句レベルの上位の機能範疇である T の主要部が出現することは無いと考えられる¹³。従って、いわゆる語形成に関わる要素としては、動詞は全て連用形で現れるのである。

次の(10)の環境、「連用形そのままで名詞として使用される」場合も基本的には(8)、(9)と同様に分析されると考えられるが、これもまとめて取り扱える点が本稿の分析の利点の一つでもあるので、詳しく説明する。まず、この動詞派生名詞（以下「連用形名詞」と呼ぶ）の構造は DM のような統語的アプローチでは次のように分析される。

(22) a. 泳ぎ

b. [N[v oyog[+V]] ∅[+N]]

統語的に名詞になった時点で、この要素が直接 T[-Past]と関係を持つ可能性は無くなると考えられる¹⁴。従って、これまでのケースと同様に(13d)の規則が適用され、/oyog/に/i/が挿入されて/oyogi/となる。

ここで重要な点は、連用形自体が名詞化の機能を持つわけではないということである。むしろ、連用形名詞を形成すると、日本語の形態論的規則に従った結果として連用形が現れるのである。これは、次に示すような例を考えることによってわかる。

¹² この分析の詳細については田川(2005)を参照されたい。

¹³ その内部にある程度大きな統語的構成素を形成すると考えられている「～方」の場合でさえ、VP レベルまでの投射であると考えられている（影山(1993)、伊藤・杉岡(2002)）。

¹⁴ 名詞述語として使用される場合も、時制辞と関係を持つのは繫辞であると考えられる。

(23) 思わせぶり → omow+(s)ase+bur+Ø[+A] (思わせぶりの態度)

このように、連用形はいわゆる形容(動)詞になる場合もある。もし連用形という形態自体に範疇変化の機能を担わせるのであれば、名詞化と同様、形容(動)詞化の連用形も想定しなければならなくなる。しかし、本論の枠組みに従えば、そのような指定は必要無く、連用形名詞の場合と同様に分析できる。すなわち、連用形形容(動)詞を形成し、(13)の規則に照らし合わせて必要であれば/i/が挿入され連用形が現れるのである。

以上の分析では、それぞれの環境において動詞語幹が T[-Past] と関係を持てない理由も、そこで形成されている統語構造も様々であるということに注意されたい。このような雑多な環境を何らかの共通の統語構造や機能などと結びつけようとするが無理が生じる。一方、本稿の分析では DM を採用することによって、それらの環境に同一の形態が生起することを ad hoc な統語的操作や複雑な形態論的規則を仮定することなく捉えることが可能になっている。

4.2 動詞語幹が T、あるいは T[-Past] と関係を持てる場合に現れる連用形

本節では、さらに二つの環境について検討し、本稿の分析の妥当性を検証する。まずは、非過去形と過去形の非対称性について考える。

(24) a. 指す : {V[+V], T[-Past]} → 終止形 ((13c))

b. 指した : {V[+V], T[+Past]} → 連用形 ((13d)) + 「た」

(24)に見るように、TP という同じ大きさの統語的構成素を形成する場合でも、Tにある素性が[-Past]の場合は終止形が現れる ((24a)) のに対して、その素性が[+Past]である場合は連用形が現れる¹⁵ ((24b))。この対比も本稿の分析からすると、下線で示したように (13) の規則群によって参照される素性の違いから捉えることが出来る。これは、連用形といった形態とある統語的なサイズの対応を想定する分析は不可能であるということを示している。すなわち、「動詞が連用形であるから XP までの投射が存在する」とは言えない。なぜなら、上で示したように同じ大きさの投射を持っても素性の値の違いで形態が異なってくる場合があるからである。

次に、テ形節の場合について考察する。以下の例に示すように、「て」には連用形が接続する。

(25) 太郎はおもちゃを壊して、母親に怒られるに違いない。

¹⁵ T[+Past]に対しては/ta/が挿入される。

ここで問題になるのは、内丸(2006)で示されたように、その節に時制辞を含む(場合がある)、ということである。また、その素性は[±Past]両方可能である。では、なぜこの場合に終止形が現れず、連用形が現れるのだろうか。

これはすでに提案されている、内丸(2006)の分析から自動的に解決される。内丸(2006)はテ形節がその節内に過去の時制辞も生起させない((26a)) ことなどから、時制辞の削除分析を提案している。

(26) a. 太郎はおもちゃを壊し(*た)て、母親に怒られた。

b. *太郎はいつもおもちゃを壊すて、母親に怒られる。

また、(26b)に示すように、終止形も現れることができない。これらの現象については、内丸(2006)に従い、テ形節を形成する環境の下では常に[+Past]も[-Past]も削除されると考えると、これまでの分析の枠組み内で「て」に連用形が前接することが導かれる。すなわち、テ形節がどのような構造を形成していたとしても、T[-Past]が無いので動詞は連用形になるのである。

これは、全体的な構造としてはT[-Past]が存在するのだが何らかの理由によって動詞語幹がその素性と関係を持てない、という点で(5)や(7)の環境と類似している。異なっているのは、テ形節、連用形接続節の場合は「動詞語幹自体は構造的にはT[-Past]と関係を持てる」という点である。ただ、関係を持つ素性そのものが削除されてしまうので終止形が現れるのが不可能になっているのである。

この議論は、(5)や(7)に対する分析とともに、DMのLate Insertionを仮定した分析が妥当であることを示している。なぜなら、このように様々な操作が活用形の出現に影響するとして、それらの操作が実際に適用されるかどうかは全ての計算が終了してからでないとわからないからである。

5. おわりに

本稿ではこれまで形式的な(形態)統語理論において積極的に取り扱われてこなかった活用(形)を分析する枠組みを明示し、現代日本語の動詞の活用形、特に最もその出現環境の予測が困難であると考えられる連用形に対する具体的な分析を例示し、「なぜ多様な環境において同一の形態が現れるのか」という問いに対しての回答を示した。本節では本稿の意義と課題を簡単にまとめておく。

まず、本稿によって活用に関する形態の出現についての予測可能な形での分析が提示された、という点が重要である。本稿の枠組みでは、「Aという環境でBという形態が現れている」ということに対する分析だけでなく、ある環境の統語構造について分析し、形態部門において解釈される表示が得られれば、そこで現れる形態に対しての予測が(13)の規則群から自動的に得られる。従って、これから様々な新しい環境について分析することにより

この理論の妥当性をテストし、より良いモデルを作り上げていくことができる。

さらに、理論的な意義としては、DM の有用性、特に Late Insertion の妥当性を経験的に示したという点が挙げられる。本稿で繰り返し述べてきたように、連用形が現れる条件は、「動詞語幹が他の活用形の具現に関する素性と統語的に関係付けられていないこと」である。こういったネガティブな特徴付けを形式的に捉えるためには、必ず Late Insertion、あるいはそれに類する概念が必要となる。なぜなら、ある素性が存在しないことや、動詞が何らかの要素と適切に関係付けられないことは統語計算が終わるまで決定されない¹⁶と考えられるからである。

本稿の連用形に対する捉え方は全く新しいものではない。いわゆる国語学、日本語学と呼ばれる研究領域においては、連用形がおおよそ動詞語幹に対応するような、言わば「小さな」形態であり、動詞の基本形であるというような指摘はしばしばなされてきたし（三上(1953)、村木(2002)など）、形式的な（形態）音韻論的研究では、子音語幹動詞連用形に現れる /i/ は epenthesis である、という分析自体は提案されてきた（Poser(1983)、Davis and Tsujimura(1991)など）。しかし、これまでの分析には、上述したネガティブな特徴付けと統語的特徴の非一対一対応、さらに連用形という形態が持つ音韻論的性質（母音の挿入によって形成されること）までをまとめて統一的に捉えられる具体的な理論が欠けていたと考えられる。本稿ではそれが DM という理論を適用することによって実現可能であることを示した。

一方、本稿では連用形が現れる各環境に対する詳細な統語的分析には踏み込めなかった。また、本稿で取り扱ったもの以外にも、連用形が出現する環境として独立して考えた方が良い現象があるかもしれない。動詞の他活用形、または形容詞、名詞など他述語の活用形の分析とも合わせて、日本語の統語構造と活用形のパラダイムの関係についての具体的な経験的議論を蓄積していきたい。

【参考文献】

- 青柳宏(2006)『日本語の助詞と機能範疇』ひつじ書房
伊藤たかね・杉岡洋子(2002)『語の仕組みと語形成』研究社
内丸裕佳子(2006)『形態と統語構造の相関—テ形節の統語構造を中心に—』筑波大学博士論文
内丸裕佳子・三原健一・西山國雄・竹沢幸一(2007)「日本語活用形への理論的アプローチ」『日本語文法学会第8回大会発表予稿集』p.71
奥津敬一郎(1981)「“せしめたしるこ”<学校文法活用論批判>」『言語』10:2 pp.18-26
影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
澤西稔子(2003)「動詞・連用形の性質」『日本語・日本文化』29 pp.47-66 大阪外国語大学留学生日本語教育センター。

¹⁶ このような言わばネガティブな特徴と形態の関係について DM の立場から分析したものに、Embick(2004)がある。

城田俊(1998)『日本語形態論』ひつじ書房
 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
 田川拓海(2005)「動詞と形容詞の形態統語論的な相違点について」『筑波応用言語学研究』12
 pp.71-84
 田川拓海(2007)「二種類の範疇変化とその構造的定義：否定の接頭辞と右側主要部の規則」『言語学論叢』26, pp.1-15.
 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
 外崎淑子(2005)『日本語述語の統語構造と語形成』ひつじ書房
 三上章(1953)『現代語法序説』刀江書院
 三原健一(1997)「連用形の時制指定について」『日本語科学』1 pp.25-36
 森田順也(2005)「派生名詞表現の分析—分散形態論的見方—」大石強・西原哲雄・豊島庸二編『現代形態論の潮流』pp.35-54

Ackema, Peter (1999) *Issues in Morphosyntax*. John Benjamins Pub Co.
 Arad, Maya (2003) "Locality constraints on the interpretation of roots: the case of Hebrew denominal verbs," *Natural Language & Linguistic Theory* 21. pp.737-778.
 Borer, Hagit (1998) "Morphology and Syntax," *The Handbook of Morphology*. Andrew Spencer and Arnold M. Zwicky(eds.), pp.152-190, Blackwell.
 Davis, Stuart and Natsuko Tsujimura (1991) "An autosegmental account of Japanese verbal conjugation," *Journal of Japanese Linguistics* 13:117-144.
 Embick, David (2004) "Unaccusativity Syntax and Verbal Alternations," *The Unaccusativity Puzzle: Explorations of the Syntax – Lexicon Interface*. Artemis Alexiadou, Elena Anagnostopoulou, and Martin Everaert (eds.), pp.137-158, Oxford University Press.
 Embick, David and Rolf Noyer (2001) "Movement operations after syntax," *Linguistic Inquiry* 32. pp.555-595.
 Embick, David and Rolf Noyer (2007) "Distributed Morphology and the Syntax/Morphology Interface," *The Oxford Handbook of Linguistic Interfaces*. G. Ramchand and C. Reiss (eds.), Oxford University Press.
 Fukui, Naoki and Hiromu Sakai (2003) "The Visibility Guideline for Functional Categories: Verb Raising in Japanese and Related Issues." *Lingua* 113, pp.321-375.
 Halle, Morris(1997) "Distributed Morphology: Impoverishment and Fission", *MITWPL* 30, 425-449
 Halle, Morris and Alec Marantz (1993) "Distributed Morphology and the pieces of inflection," *The view from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvan Bromberger*, Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser(eds.), pp.111-176, MIT Press.

- Harley, Heidi and Rolf Noyer (1999) "Distributed Morphology", *Glott International*. 4:4, pp.3-9.
- Marantz, Alec (1997) "No escape from syntax: don't try a morphological analysis in the privacy of your own lexicon." *UPenn Working paper in Linguistics*. 4:2, pp.201-225
- Marantz, Alec (2001) "Words," ms. at *WCCFL*. Santa Barbara.
- Miyara, Shinsho (1991) "On the Insertion of /s/-Form (suru)," 『言語研究』 99 pp.1-24
- Nishiyama, Kunio (1998) *The Morphosyntax and Morphophonology of Japanese Predicates*. Ph.D. dissertation, Cornell University.
- Poser, William J. (1983) *The Phonetics and Phonology of Tone in Japanese*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Volpe, Mark (2005) *Japanese Morphology and its Theoretical Consequences: Derivational Morphology in Distributed Morphology*. Ph.D. dissertation, Stony Brook University.